第08章 — 刃の向こう側

01 — 時間の途切れ

儀礼館の後ろの壁時計は、ごく短い時間止まっていた。しかし別の機械式駆動で動く独立証人記録器は止まっていない。ヌルが通信でずれを確認した。ただちに時間の断裂と呼ぶことは拒んだ。不安定な時計は不規則な音を出すことがある。しかし停止は、ハヴェルが最も長い不可視の一撃を放った瞬間と一致していた。

ロイにその謎を解く時間はない。ハヴェルは刀を低くして柱の周囲を進んだ。元大臣は証人も審理も裁判所も資料も忘れているようだった。残ったのは勝負だけ。その事実は刃より恐ろしかった。

大臣は傷んだ脚を狙って斬った。ロイは下がる。鋼は外れた。集中した圧力が石床を走り、膝の下の支えを打つ。ロイは均衡を失って柱へ倒れた。

「測れるだろう」とハヴェルは荒い息で言った。「では理解できるか？」

「人を傷つけるのを止めない男なら理解できる」

ロイは声を静かに保った。怒りは次の動きを速く、しかし不正確にする。今必要なのは速さより正確さだった。

02 — 刀が運んだもの

レイチェルは観測用の回廊から二つ目の記録を命じた。機械式シャッターには空気を斬る刀身だけが映り、飛翔体はない。音響センサーは短い圧力ピークを、床の振動計はそれに対応する衝撃を拾う。先行する電磁バーストも、刃からの化学的な噴出も見つからなかった。

「何かが伝達されている」とレイチェル。「どの媒体で、どこまで届くのかは不明」

「なら刀と呼ぶのをやめるべきだ」とヌル。「刀は別の出来事の方向を示しているだけかもしれない」

ロイにも聞こえた。彼は刃ではなくハヴェルの足を見る。踵が沈み、息が一瞬止まり、肋骨沿いの筋肉が雷神の短い打撃に似た順序で収縮した。動きは肩、手首、刀へと狭い時間窓を通じて続く。

新たな圧力が刃先から外へ走った。

ロイは届く前に身を翻した。圧力が吊るされた儀礼用の旗を細く裂き、後ろの木板を震わせた。

「全身が武器なんだな」とロイ。

「初めからそうだった」とハヴェル。「刀は空気に聞く場所を教えるだけだ」

その言葉が説明なのか比喩なのか、老人の信念が偶然未知の物理現象と合っているのか、ロイには判断できなかった。

03 — 制御の代償

次の攻撃は途中で失敗した。ハヴェルの手が震え、息が引っ掛かり、二歩目を踏んでようやく構えを取り戻した。負担が見える。人間の技は人間の限界をなくさない。

今なら突っ込めた。七十パーセントでも無防備な腕を砕ける。刀も落とすだろう。しかし老人はそこで死に、六年の秘密は十分には語られないかもしれない。

ロイは横へ移り、ハヴェルを回転させた。老人はすぐに立て直し、首に近いところへ刃を通す。圧力が背後の手すりを打ち、金属は触れられぬまま鳴った。

「力を使うのが怖いのか」とハヴェル。

「使った後に何が起きるかを選ばずに使うのが怖い」

「そのためらいが人類を負けさせる」

「違う。誰かが明日また俺たちに反対できる理由だ」

ハヴェルは懐へ踏み込み、ロイの左脇の下へ素手の短い一撃を入れ、反応より早く刀を戻した。平衡制御がちらつく。ロイは刃の内側にいる人間を見つけ始めたが、安全に拘束する方法はまだない。

04 — 古い教え

風神の言葉が戻る。「私が何を守っているかを見ろ」

ハヴェルが守っているのは信念だった。人工の人々が人間より長く生きる可能性に耐えられない。長寿を所有権の移転だと想像しているからだ。刀の一振り一振りは、人類に残された置換不能な優位を証明しようとする試みになっていた。

では物理的に何を守っている？ 回廊でも証人でもない。大臣はいつも壊れた閉じ込め棚を左肩の背後に置いていた。視線を追うと、壁に細い引き出しがある。封印の下から古い紙の端が突き出ていた。

「記録をここへ持ってきたんだな」とロイ。

ハヴェルの目が足より先に動く。ほんの一瞬の視線だった。それで足りた。

ロイは引き出しへ動いた。ハヴェルは水平の斬撃で阻み、コートへ浅い圧力の線を入れた。ロイは左腕で小さな衝撃を受け、壁へ進んだ。記録を盗むためではない。刀の間合いが制限される場所へ大臣を誘うためだった。

「今でも燃やすつもりなのか」

「我々が置き換えられるための設計図になどさせない」

05 — 人間の選択

扉から雷神の声が響いた。「大臣。もう終わりです」

ハヴェルは振り向かなかった。「私のそばに立つと誓っただろう」

「あなたの命を守ると誓いました。彼の命を奪う手助けはしません」

「お前まで、あいつが何者かを忘れたか」

「いいえ」と雷神。「あいつの命の価値を決める権利など、最初から私にはなかったと学びました」

風神は証人席の横へ動き、戦う二人には近づかなかった。医療班への通路を守り、彼らが攻撃の線へ押し込まれないようにする。

ハヴェルの顔が変わった。ロイは初めて、大臣が想像より年老いて見えるのに気づいた。彼の権威を拳で運んできた二人は、もうその手を貸すつもりがない。

「私を残酷だと思うか」とハヴェル。

「今、危害を選んでいると思います」と風神。「まだ別の選択ができます」

ハヴェルは刀を上げた。刃先の周囲で空気が濃くなるように見えたが、感覚は誤る。後ろの時計がまた一拍飛んだ。

「いや。もう時間がない」

06 — 短い間合い

ロイは踵が沈む瞬間、次の斬撃の内側へ踏み込んだ。見えない圧力は背後へ抜け、石の銘板を打つ。冷たい針金のように衝撃の端が肩をかすめた。ロイは左手で大臣の手首をつかむ。普通の拘束範囲を超えてねじらないよう注意した。

ハヴェルの空いた掌がロイの胸へ触れた。

ありえないほど近い距離からの一撃。集中した圧力が胸骨を通り、右肩の傷んだ支持部へ入る。視界が白く飛び、しばらくは自分の系が壊れていくリズムしか聞こえなかった。

大臣は引くこともできた。しかしさらに掌を押し込み、体重を預けた。ロイは水門での風神の教えを思い出した。力に逆らうのをやめ、その周囲を回った。ハヴェル自身の運動量が、回復できる重心位置の向こうへ身体を運んだ。

ロイは刀を持つ手を木製手すりへ当てた。金属音とともに刀が落ちた。ハヴェルは奪い返そうとしたが、ロイは殴らず、既に失われた均衡の位置へ踏み入れて阻んだ。

半呼吸の間、勝負は終わっていた。

しかしハヴェルは衣服の折り目から短い刃を抜いた。

07 — 最後の古武術

短刀は昔ながらの稽古用具に似ていたが、刃は殺傷可能なほど鋭かった。ハヴェルは前腕に沿わせて構え、不慣れな角度からロイの左肩の下を狙った。長刀より小さく実用的な古い技。

ロイの戦術資料には幾十もの対応がある。その多くは人間の手首を折り、あるものは肘を壊す。最速の選択肢は殺すことだった。

ロイは二人が生き残れる可能性を持つ中で、最も遅い応答を選んだ。大臣の肘近くの前腕を捕らえ、傷んだ肩を攻撃線から外し、落ちた刀との間に腰を入れる。

ハヴェルは空いた手で再び打った。ロイの制限装置が作動し、胸の下の支持部が壊れた。倒れながら彼は、大臣を壊れた手すりへ引き込むのではなく、そこから遠ざけた。

二人は石床へ落ちた。短刀が証人席の下の影へ滑った。

大臣の頭が高い壇の縁に当たった。あれほどの暴力のあとでは、小さすぎるほどの動きだった。恐ろしい静寂が続いた。

ロイはすぐに腕を離した。ハヴェルの髪の下へ血が広がる。意識はあるが、呼吸が変わっていた。胸は努力して上がるものの、動きが最後まで続かない。

「医師を。今すぐ」

08 — 答えの代償

救急隊員が駆け寄った。ハヴェルは払いのけようとした。雷神は傍らにひざまずき、男の手を握って身体を起こさせなかった。記録器は回り続ける。落ちた刀も、警官が位置を記録するまでは動かされなかった。

「もっと早く殺せたはずだ」と雷神が静かに言った。

「分かっている」

「殺さないようにした」

「それでも足りなかった」

救急隊員は瞳孔と首を調べた。「緊急手術が必要です。病院まで間に合わないかもしれない」

ハヴェルは二本の指を上げ、壁の封印された引き出しを指した。レイチェルが立会人を見る。装置の故障で資料が失われるおそれがあり、保護のための開封が許可された。

中には百年連続性研究の写し、抑圧された試験一覧、そして「六年／人間優先」と記された署名入り執行命令。

ハヴェルはレイチェルが紙を上げるのを見つめた。痛みと安堵のようなものが顔にあったが、ロイはどちらが本当か決めつけなかった。

「尋ねろ」と大臣は囁いた。

レイチェルはひざまずいた。「なぜ、六年にしたの？」

ハヴェルは目を閉じた。答えには、残された呼吸のほとんどを使う必要があった。